科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））研究進捗評価

課題番号	17H06151	研究期間	平成２９(2017)年度 ～令和３(2021)年度
研究課題	住環境が脳・循環器・呼吸器・運動器に及ぼす影響実測と疾病・介護予防便益評価	研究代表者 （所属・職） （令和４年３月現在）	伊香賀 俊治 （慶應義塾大学･理工学部（矢上）・教授）

【令和２(2020)年度　研究進捗評価結果】

評価		評価基準
	A＋	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○	A－	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（意見等）

本研究は、住環境改善が居住者の健康状態に及ぼす影響を実証的に調査分析し、科学的根拠を獲得するものであり、疾病・介護予防のコベネフィット評価を行うものである。

ステップ１のベースライン調査については多様な地域で大規模に実行しており着実に研究成果が出ている。ステップ２のコホート・介入調査についても事例調査を実施済であるが、コホート分析には時間を要するため、やや遅れが認められる。また、健康状態に関して研究成果が公表されていない分野・項目があり、研究が進捗していないことが懸念される。2020 年度から行うステップ３の疾病・介護予防コベネフィット評価は、これらの分析データがそろって初めて総括的な評価ができるものであることから、研究実施スケジュールの見直しが必要である。

【令和４(2022)年度　検証結果】

検証結果	
A－	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。 温湿度などに関わる住環境の改善が健康寿命延伸に及ぼす効果を、大規模なフィールド調査と追跡・介入調査によって定量化し、住環境対策を含む健康政策を進めるに当たっての科学的、定量的な根拠を与える成果をおよそ得ることができている。一部の調査が遅れ、分析が十分に終わっていない項目があり、副次的経済便益の可視化の途上にある。今後、当初の研究計画に掲げていたように、住環境改善による将来的な医療費・介護費の削減効果を貨幣価値換算で説明することを求めたい。